

Title	セム語人称接尾語に関する一考察
Author(s)	伴, 康哉
Citation	大阪外国語大学学報. 6 p.142-p.153
Issue Date	1958-04-01
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80141">https://hdl.handle.net/11094/80141</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## התבוננות על היחס של הכינויים הדבוקים

מאת בן קוסאי

### סיכום

זוהי התבוננות בלשונית על אודות היחס של הכינויים הדבוקים בלשונות השמיות. הכינויים הדבוקים בדרך כלל רומזים על יחסיהם אל הקנין והפעול. אולם יש שהם משומשים כיחס הנושא. למשל, אחרי 'יש', 'אין', 'עוד' העבריות, 'אית', 'לית' הארמיות, ו'לֹא' הערבית וכו'. לפיכך נתברר שהם לא היו מבדילים בין היחסים במקור. וייתכן שגם הכינויים הפרודים היו כמו הדבוקים.

מדוע 'אֵן' ואחיותיה הערביות מבקשות את יחס הפעול כנושא? סבורני שזאת מפני השפעתם של הכינויים הדבוקים שהיו משתמשים בהן בכוונת יחס הנושא לכתחילה.

§ 1. セム語の名詞は通常三種の格を区別すると考えられている。主格, 属格, 対格がこれである。大体に於て主格は主語として, 対格は動詞の目的語として, また属格は他の名詞並びにあらゆる前置詞の被支配語として用いられるものといえよう。しかし実際に格語尾をそれぞれの格の觀念とともに保存しているのは古典アラビア語とアッカド語の古層とだけである。アッカド語の例, *šumma iṭinnum ana awilīm bitam ipuš-ma* … (若し建築師が人のために家を建てゝ……, ハムラビ法典 229) に見られるように, 多くの場合名詞は語尾の -u, -i, -a によってそれぞれ主格, 属格, 対格を示す。そのほかに位格 (*casus locativus*) ともいうべき第四の格を認める余地がある。アラビア語の *qabl-u* (前に), *taḥt-u* (下に), アッカド語の *šēp-ā-a* (わが足もとに, センナケリブ六角柱) 等に痕跡を留めているものがそれであるといわれる。更にもう一つの格を考えることが出来るけれども, これについては別の機会に述べたい。さて人称代名詞になると様子が大変違って来る。常識的には主格には独立した形が用いられ, 属格と対格には接尾語の形をとると理解されている。なお若し第四の格を人称代名詞に関しても拡張して考えて

みるならば、アラビア語の指示代名詞 *ḥā(-li)-ka*, *ti-l-ka* 等における二人称の接尾語はまさにこの格の意味で添えられたと解釈される（〔あなたの所にある〕それ）。本来は勿論話し相手の性、数に応じて相当する接尾語を使い分けた。 *qālat, fa-ḥālikunna -llaḥi lumtunnani fihi*.（彼女は言った、その男こそ貴女がたが私を非難するもとなった当人ですよ）ヨセフ章32。要するに主格以外の格即ち斜格（*casus obliquus*）は普通接尾語の形で表わされる。こゝで附言しておきたいのは一人称単数の接尾語についてである。一般に属格のときは *-ī* であるが、対格の場合は *-nī* であって、子音 *n* の有無によって格が識別されている。しかしこの *n* は本来のものではないから、最初はこれによって対格が区別されたわけではない。このような *n* は一人称単数以外にも挿入されていることがある、勿論格とは無関係にである。後述のヘブライ語 *ješ*（ある）に接尾した三人称単数男性 *ješ-nō*, 同女性 *ješ-nāh*, 同複数男性 *ješ-nām* 等における *n* はその一例である。フェニキヤ語の三人称複数男性の接尾語には *-M* と並んで *-NM* という形がある。例、*'B-NM*（彼等の父）。

§ 2. 周知のように人称代名詞的な観念を表わすためにセム語では四つの形が用いられる。独立性の高いものから順に言えば、人称代名詞、人称接尾語、人称語尾、人称的接頭素となる。最後のものは、一人称複数为例にとると、アラビア語 *na-rkabu*, ヘブライ語 *ni-rkav*, シリヤ語 *ne-rkav*（我々は乗る）及びアッカド語 *na-rkab*（我々は乗った）のように動詞変化の一部をなしている。この点完了動詞につく人称語尾もそれに似ているが、いわゆる変化している形からこの語尾を除けばもとの非人称形すなわち実際には三人称単数男性形が残ること、また必ずしも動詞のみに附加されとは限らなかったこと等から多少の独立性は認められる。両者とも専ら主格の位置にある。アラム語では主として人称語尾を補う意味でもう一つの手段が発達した。それは後倚的人称代名詞（*pronomen personale encliticum*）といわれるもので、人称代名詞の簡略形である。最初は述語としての分詞の語尾につけて用いられていた。聖書アラム語 *təqēl: təqīl-ṣā vēmōzənajjā wəhištazāḥat ḥassīr*.（テケル“量られたり”とはあなたが秤で量られたということで、その結果は量が不足だったのです）ダニエル書 5:27。バビロニア・ユダヤ人アラム語 *'šJP-N' (= 'āšēf-nā) LKWN B'JšP' DJM' W'JšP' DLJWJTN TNJN'*.（わしはお前達に海の魔法と怪竜レビヤタンの魔法をかけてやるぞ）Rossell, A Handbook of Aramaic Magical Texts, text 4. バビロニア・タルムウド・アラム語 *'āmārī lēh: 'ī qāṭal-att lan, 'āmārī: nāšē qəṭal; 'ī qāṭalī-nan lāz, 'āmārī dināšē qəṭalūāh*.（彼女等が彼〔アレキサンデル〕にいうには、もし貴方が私達を殺せば女達を殺したといわれますよ、もし私達があなたを殺せば女達に殺されたといわれますよ）日常の燔祭。シリヤ語 *wemetṭōl 'ūriš-*

lēm d-āmārit-tōn dəvəθ seʔdəθan -i, 'āf bəθ seʔdəθan tūv 'iθəh; wəjattīr menkōn mawrəvīn-nan wa-mjaqqərīn-nan lāh 'axmā dallāhā pəqað lan bəqōran dīleh. (またエルサレムについては、あなた方は‘我々の礼拝の場所である’といっておられるが、それはまた我々の礼拝の場所でもある。しかも我々は神が御書コオランの中に命じ給うた所に従って、あなた方よりも一層こゝを重んじ尊んでいるのである) バル・ヘブライウス、シリヤ年代記。最後の例における -i は分離して書かれているがやはり後倚的であって、三人称単数女性 *hī* の簡略形である。シリヤ語では更にこのような繫辞的用法が発達している。中世以降のヘブライ語ではアラム語の模倣によって若干の分詞とともに一人称単数の後倚的代名詞が用いられている。 *hōšəʕani šemmā lō 'e'ēmōð bī*. (私は辛抱できるかどうか心配だ) アグノン、一枚の銅貨。その他 *hōšəʕani*, *səvūrani* (私は思う、私には思われる), *məsuppəqani* (私は疑う) 等がある。女性の分詞とともに用いられた例, *hōšəʕaθni šezzōθ hī. kēn, nāʕōn, hinnē rā'āθā 'ōθānū* [現代音は *choshvatni shezot hi. ken, nachon, hine ra'ata otanu, ch=ʕ, sh=š*]. (あれが彼女らしいわ。やっぱりそうよ、ほらわたし達の方を見たわ) Chaim Rabin, *Everyday Hebrew*, p. 98. 近代アラビア語方言に於ても後倚的な人称代名詞の例に遭遇する。いちじるしいものには *manīš* (私は～でない) のように否定語 *ma~š* に接申した形がある。これらの例だけから考えれば、後倚的な人称代名詞も亦表わす格は一般に主格であるらしく思われる。

§ 3. こゝで少しアラビア語の *lajsa* について述べよう。 *lajsa* は次の例のように主語たる事物の存在を否定し、或は否定の断定を示す。 *wa-maθalu -lmunāfiqi -llađī lā jaqra'u -lqur'āna kamiθli -lhanḏalati lajsa lahā riḥun wa-ṭa'muhā murrūn*. (偽信者にしてコオランを読まぬ者を譬えればコロシントの実のようであって、香気がなくまた味は苦い) マホメットの言。 *lajsa -lbirra 'an tuwallū wuḡūhakum qibala -lmašriqi wa-lmagribi*. (お前達が顔を東にまた西に向けるのは信仰篤きことではない) 牝牛章172. *lajsa* は他の否定語と違って完了動詞と同じ人称変化を行う、すなわち人称語尾をとることが出来る。変化表は次の通りである。

	単 数	複 数	双 数
三人称男性	<i>lajsa</i>	<i>lajs-ū</i>	<i>lajs-ā</i>
女性	<i>lajs-at</i>	<i>las-na</i>	<i>lajs-atā</i>
二人称男性	<i>las-ta</i>	<i>las-tum</i>	} <i>las-tumā</i>
女性	<i>las-ti</i>	<i>las-tunna</i>	
一人称	<i>las-tu</i>	<i>las-nā</i>	( <i>las-nā</i> )

厳密に言えば人称語尾は一人称と二人称だけであって、三人称に於ける語尾は性、数を示しているに過ぎない。三人称単数男性形は語尾を持たない。これは完全に非人称的である。セム語のあらゆる動詞の基本形、いわゆる完了三人称単数男性形は実はこのように非人称なのである。古典アラビア語の場合に現れる語末の -a は特殊な音韻事情によるものであって、形態論的な意味はない。ともかく *lajsa* は人称語尾をとるというだけの故に一応動詞として分類されている。しかし正真正銘の動詞と見るのは甚だ困難なので、文法家はこれを否定動詞と称し、或は缺如動詞の中に数えて別格に扱っている。その理由を列举すると大体次のようになる。第一に未完了形をもたない、従って勿論命令法もない、ことである。これは致命的である。また、*lajsa* は統辞論的には述語の位置を占めるのが普通であるが、時には単なる否定語に過ぎず述語としては別に動詞が用いられていることもある。しかも *lajsa* は屢々非人称的でさえある。faqāla -lhurmuzānu, 'a-wa-*lajsa* qad 'a'tajtani -l'amāna. qāla, matā. faqāla, 'a-*lasta*, qulta lā ba'sa 'alajka ḥattā tašraba, walam 'ašrab. (そのときホルモザンは言った、あなたは既に私の身の安全を保証して下さったではありませんか。〔オマルは〕言った、何時。彼は言った、お前が飲み干すまでは心配無用じゃとおっしゃったではありませんか。ですから私は飲みませんでした) アル・バトルウニ、当意即妙選。subḥāna ḥāliqihinna, *lastu* 'aqūlu -ššuhbu kābijatun ma'a -ddahri. (それら〔日月星辰〕を創りたまひし方に榮えあれ、私はその輝きが時とともに消えうせるとは思わない) アル・マアルリイ。こういう場合は通常の否定副詞 mā 或は lā に置き換えることが出来る。その他やゝ弱い理由として、時の観念を欠く、意味が動詞らしくない、語形の点でも動詞というには少し変態である、受動態がない、等が挙げられる。しかしこゝで *lajsa* の品詞を決定するつもりはない。たゞ言っておきたいのは人称語尾が動詞か否かを判定する極め手とはならないということである。*lajsa* のようなもの、明確に言えば、アラビア語に関する限りに於て、人称語尾をとることが出来るけれども動詞とは言い難い語、を一括して暫く擬似動詞 (pseudo-verbum, PSJDW-PW'L) と呼んでおく。'asā (多分) も擬似動詞である。これは非人称的に用いられる方が普通であるが、次の例のように人称語尾をとることが出来る。変化の点では全く第三弱動詞 (verbum tertiae infirmae) に等しい。fahal 'asajta, 'in nahnu fa'alnā ḏālika ḥumma 'aḏharaka -llāhu, 'an targi'a 'ilā qawmika watada'anā. (我々がそのことを行って神があなたを勝たせ給うた暁は、多分我々を棄てゝあなたの民のもとにお歸りになるのでしょうかね) イブン・ヒシャム、マホメット伝。しかしまた人称語尾の代りに人称接尾語をとることも認められている。waḥḥāliṯu 'an jaqūlū 'asāka 'an taf'ala 'ilā 'asākunna, wa- 'asāhu 'an jaf'ala 'ilā 'asāhunna, wa- 'asāni 'an 'af'ala wa- 'asānā.

(第三の言い方はこうである, 'asāka 'an taf'ala “多分あなたにはするだろう”, 等々) ザマフ  
 シヤリ, 文法詳解. これは注目すべきことである. Lane, Arabic Lexicon には更に次のよう  
 な特異な用例が挙げられている. faqultu, 'asāhā nāru ka'sin wa'allahā tašakkā, fa'atī  
 naḥwahā fa'a'ūduhā. (私は思った, 多分それはカアス〔女性の名か〕の火であろう, 恐らく彼  
 女が訴えているのであろう, だから私は行って彼女を見舞ってやろう).

§ 4. lajsa の対応はアラム諸語に見出される. シリヤ語の lajt, タルグム・アラム語の  
 lajiθ 又は lēθ 等, 一般に綴字 LJT で表わされているものがこれである. 各方言における用例  
 は次の通りである. シリヤ語 ləmanā mallef 'att julpānā meddem dallāhē wənāšā sānēn  
 leh wəmeddem dəšappīr lajt beh. (何故お前は神々にも人々にも嫌われ, しかも何のよいこ  
 ともない教を説いているのか) ユダ・トマス行伝. バビロニヤ・タルムウド・アラム語 lēθ  
 da'ānē mikkalbā wə-lēθ də'attir mē-ḥazīrā. (犬より貪しいものはない, 豚より富めるもの  
 はない) 第一の門. タルグム・アラム語 lēθ 'asū beṛušmī min qōḏām ruṣzāz, lēθ šəlām  
 bə'ēvārī min qōḏām ḥōvī. (あなたの怒りの前には私の肉体に健やかさはなく, 自らの罪の前  
 には私の五体に安らかさはありません) 詩篇38:4. クリスタン・パレスチナ・アラム語 LJT  
 GR ŠWLṬNWT' 'L' 'N MN 'LH'. (何となれば神からのものでない限り 権威はないからで  
 ある) ロオマ人への手紙13:1. アラム語にはまた存在或は肯定の断定を表わす語があって, LJT  
 と対をなしている. 'JT(J) と綴られているものがこれである. シリヤ語 'aḥīqar, pašseq lī  
 maḥlā hānā. 'eṣṭōnā ḥaḏ 'iθ 'al rišeh tərē'əsar 'arzē. bəzul 'arzā tēlāḥīn gīrlē. wavḥul  
 gīrlā tərēn ḥavlin, ḥaḏ hewwārā wəḥaḏ 'ukkāmā. (アヒカルよ, この譬えを説明してくれ. 一  
 本の柱があってその頂に十二本の杉の木がある. どの杉の木にも三十の車輪があり, 各車輪には一  
 本が白く一本が黒い二本の綱がついている) アヒカル物語. タルグム・アラム語 'āmar nāvījā,  
 'iθ 'āṛar ləšaddīqajjā wə-'iθ por'ānū lərašši'ajjā. (予言者は言った, 義人のために報  
 酬があり, 悪人のために報復がある) イザヤ書21:12. クリスタン・パレスチナ・アラム語  
 BHWN 'JT HW RWH' DQWŠṬ'. (彼等には真実の精神があった) ペテロとパウロの讃歌,  
 A Palestinian Syriac Lectionary (Studia Sinaitica No. VI.) ed. by Agnes S. Lewis,  
 p. 138. 聖書アラム語では 'iθaj となっている. bəram 'iθaj 'ēlāh bišəmajjā gālē rāzīn.  
 (しかしもろもろの秘密をあらわす神が天におられます) ダニエル書2:28. 帝国アラム語 WK'T  
 'JTY GBRN HJL[KJN] 'BDN ZJLJ BMSRJN. (さてキリキヤ人で私の奴隷達がエジプトに  
 おります) G. R. Driver, Aramaic Documents of the Fifth Century B. C., Letter V.  
 容易に推察されるように LJT は否定語 L' (=lā) と 'JT の縮約である. 実際 バビロニヤ・

タルムウド・アラム語に於てさえ縮約しない *lā 'iθ* のまゝで用いられている例が見られる。聖書アラム語にまで遡れば常に *lā 'iθaj* であって、縮約形はまだ現れていない。 *hēn qirjəθa ḏāx tiθbənē wəšūrajjā jištazləlūn, loqōvəl dənā ḥālāq ba'āvar nahārā lā 'iθaj lāx.* (もしこの町が建てられ城壁が完成したならば、その結果は川向こうの領分はあなたのものなくなるでしょう) エズラ記4:16. アラム語の 'JT に対応するヘブライ語は *jēš* である。 *jēš zāhāv wərov pənīnīm, wūzəlī jeqār šifəθē ḏā'aθ.* (黄金があり、珊瑚も多い、しかし知識の唇こそ高貴の器である) 箴言20:15. この語は少くとも旧約聖書では否定語 *lō* と共に用いられていない、否定の場合には別に *'ēn* という語がある。ヨブ記9:33には *L' jēš bēnēnū mōxīāḥ jašēθ jāḏō 'al šənēnū* とあるが、こゝの *L'* は *lō* ではなくて *lū* (=LW) と読むべきであろう。七十人訳 (EI9E HN …) はこの説を支持する。従って上の意味は (私たちの間に仲裁者がいてくれればよいが、そうすれば私たち兩人に手を置いてくれるだろうに) となる。さて *'ēn* はアラビア語の否定の *'in* に対応する。 *wə-'ēn kol ḥāḏāš taḥaθ haššāmeš.* (日の下に如何なる新しいものもない) 伝道の書1:9. アラビア語 *'in* の例、 *'in ḥāḏā 'illā malakun karīmun.* (これは貴い天使に他ならない) ヨセフ章31. モアブ語で記されたメシャ王碑文にも *'ēn* に相当する *'N* が見られる。WBR 'N BQRB HQR BQRHH W'MR LKL H'M 'ŠW (= 'SW) LKM 'Š BR BBJTH. (ケレホにおける町の中には水ためがなかったので、予はすべての民に各自その家に水ためを造れと命じた) 24, 25行. アッカド語における *jēš* の対応は *išū* であるが、これは動詞であって 'to have' に近い。過去形 *iši* 又は *išu* 現在完了的に用いられた。 *ša arnu išū tapaṭṭar arnu.* (罪あるものからあなたは罪を除きたもう) ニニブ神への祈願。否定の場合は *lā* 又は *ul* を前置する。 *šumma awīlum iššalilma ina bītišu ša akālim lā ibaši, aššassu ana bītim šanīm īrub, sinništum ši arnam ul išū.* (もし人が捕虜として連れ行かれ、その家に食うべきものなくして彼の妻が他の家に入るときは、その女は無罪である) ハンムラビ法典134. 以上のようにアラビア語では他のセム語の *išū*, *'iθ*, *jēš* に対応するものはたゞ否定語との縮約形に於て保存されているに過ぎない。ところが *mā ja'rifu 'ajsa min lajsa.* (彼は有と無の区別を知らない) のような成句があって、一見こゝに *'ajsa* という形で原始語の名残を留めているかのように思われる。しかし比較言語学から再建されるアラビア語は *\*jis(a)* であって、*'ajsa* という形を割り出すことは出来ない。それ故 *'ajsa* は *lā \*jis(a)* から *lajsa* となった過程が忘れられた後に、誤った類推による *lajsa* の分析から逆に造語されたと考えるべきである。

§ 5. アラム語の *'iθaj*, *'iθ* 並びにヘブライ語の *jēš* は一般に副詞と見られている。少なくとも動詞ではないということに疑点はない。LJT や *'ēn* についても同様であることはいうま

でもない。これらは皆よく人称接尾語をつけて用いられる。概して時代が下るにつれて人称接尾語のついたものが一層頻繁に現れてくる。しかし既に聖書アラム語に於てさえダニエル書には若干の用例がある。ha-'iθāχ kāhēl ləhōdā'ūθanī hēlmā dī hāzēθ wūfišrēh. (一体お前はわしにわしの見た夢とその解釈を示すことが出来るのか) 2:26. wəhēn lā, jəđiā' lehēwē lāχ malkā di lələhāχ lā 'iθānā fāləhīn wūləselem dahāvā dī hāqēmtā lā nisgūd. (そうでなくても、王様、あなたの神々に私たちは仕えないし、あなたのお建てになった黄金像を私たちは拜まないものと御承知おき下さるように) 3:18. シリヤ語では人称接尾語のついたものが極めて盛に用いられる。存在の有無よりも断定を表わす用法がはるかに多い。いま 'iθ がそれぞれの接尾語をとった形を示すと、次のようである。

	単 数	複 数
一人称	'iθaj	'iθajn
二人称男性	'iθajk	'iθajkōn
女性	'iθajk	'iθajkēn
三人称男性	'iθaw	'iθajhōn
女性	'iθeh	'iθajhēn

用例, 'att hāχēl daxristjāniθā 'itajk lā teđmēn bəneššē 'ajlēn dəđāχ hāχannā 'ennēn, 'ellā 'en šāvja 'att dəθehwēn məhajmanθā, ləva'lēχ balhōd həwajt šāfrā. (だから基督者である貴女はこのような種類の女達と同様であってはいけない、若し信者であることを欲するならばたゞ夫にのみ喜ばれるようにしていなさい) 使徒の教訓. 'avū dēn 'iθaw wā men nəšivīn dəvēθ təhūmē, 'əđakkēl gēr lā šəqilā wāθ ləfārsājē. 'emmeh dēn 'iθeh wāθ men 'āmīd məđittā. (彼の父は国境の町ニシベの出であった、というのはそこはまだバルシャ軍に占領されていなかったからである。母はアミド市出身であった) シリヤの聖者エフレイム伝. pilōsofā nāš qūniqā men 'alexsanderijā šēl [men malkā] həđ maθqālā dəđahvā. wəmkā panni leh, də-lajtaw hānā men mawhəvāθā dəmkā. hū dēn šēl kazrā həđā. wəmkā panni, də-lajtēh həđē men tev'āθā dəqūniqō. (アレキサンドリヤから来たある犬儒哲学者が〔王に〕黄金一シケルを乞うた。王は答えた、これは王者の贈物ではない。そこで彼は一タレント [=3,000シケル] を乞うた。王は答えた、これは犬儒学派の輩の要求ではない) バル・ヘブライウス、笑話集。ヘブライ語に於ては jēš に人称接尾語をつけて用いることは比較的少いが、これに反して 'ēn についたものは極めて頻繁に用いられている。wajjōmer hāmān lammeleχ 'āħəšwērōš, jēsno 'am 'eħāđ məfuzzār wūməfōrāđ bēn hā'ammīm bəzōl



maḏinōṯ maləxūṯehā, wəḏāṯehem šōnōṯ mikkol 'ām wə'eṯ dāṯē hammeleḡ 'ēnām 'ōšim, wəlammeleḡ 'ēn šōwe ləhanniḥām. (ハマンはアハシュエロス王に言った、あなたの統治し給う各州に於て諸民の間に離散している一つの民があります。彼等の法律はすべての民と異なっており、また王様の法律を彼等は守りません。彼等を棄ておくのは王様のためによくありません) エステル記3:8. wajjōmer giḏ'ōn 'el hā'ēlōhim, 'im ješḡā mōšīā' bəjaḏī 'eṯ jiśrā'el ka'ašer dibbartā, hinnē 'ānōḡī maššīṯ 'eṯ gizzaṯ haššemer baggōren; 'im ṭal jihje 'al haggizzā ləvaddāh wə'al kol hā'areṣ ḥōrev wəjāda'tī kī ṯōšīā' bəjaḏī 'eṯ jiśrā'el ka'ašer dibbartā. (ギデオンは神に言った、あなたの言われたように若し私の手によってあなたがイスラエルをお救いになるのであれば、私は刈り取った羊の毛を麦打場に置きますから、大地がすべて乾いているのに若しその羊の毛の上にだけ露がおりていましたならば、仰せのように私の手によってあなたがイスラエルを救おうとなさるのだということを納得するでしょう) 士師記6:36, 37. wajjōmer jirməjahū, šeqer, 'ēnennī nōfēl 'al hakkašdīm; wəlō šāma' 'ēlāw, wajjiṯpōš jir'ijā bəjirməjahū wajəvi'ēhū 'el haššārīm. (エレミヤは言った、嘘だ、私はカルデヤ側に落ちようとするものではない。しかしイリヤは彼のいうことを聞かないで、エレミヤを捕えて高官達のもとへ連れて行った) エレミヤ書37:14. wajjiṯhallēḡ ḥānōḡ 'eṯ hā'ēlōhim, wə-'ēnennū kī lāqah 'ōṯō 'ēlōhim. (エノクは神と共に歩んだが、今はいない、神が彼を取り給うたからである) 創世記5:24. このような場合におけるアラム語とヘブライ語の人称接尾語は明らかに主格の意味を持つ。もし人称接尾語が本来から斜格のためのものであったならば、こういうときには後倚の人称代名詞が用いられたか若しくはアラビア語の *lajsa* と同様な人称語尾がとられていたであろう。すでに 'asā の説明の際にも示唆しておいたように、人称接尾語は主格として用いられることも可能なのである。次の例のように 'ēn が人称接尾語の代りに独立の人称代名詞を従えていることもある。wə'ēn 'āni wə'aḥaj wūnə'āraj wə'anəšē hammišmār 'āšer 'aḥāraj, 'ēn 'ānahnu fōšetīm bəṛāḏēnū. (私も私の兄弟たちも私の若い者たちも私を護衛する人々も、すなわち我々は誰も衣服を脱ぐ者はなかった) ネヘミヤ記4:17. 更に他の例を拾ってみよう。

§ 6. ヘブライ語の *hinnē* や 'ōḏ にも人称接尾語がつけられる。ここでも 'ēn 等に於けると同様、人称接尾語は主語としての役割を演じている。wajjōmer lāh mal'aḡ JHWH, *hinnāḡ* hārā wəjōlaḏt bēn, wəqārāṯ šēmō jišmā'el, kī šāma' JHWH 'el 'onjēḡ. (主の使は彼女に言った、見よお前は妊娠している、そして男の子を産むのである。それでお前はその名をイシマエル「神聞き給う」とつけるのだ、主がお前の悩みを聞き給うたのであるから) 創世記

16:11. wajjōmer JHWH 'el haśśātān, *hinnō* vəjāḏeḏā, 'aḡ 'eθ nafšō šəmōr. (主はサタンに言った、彼はお前の手中にあるのだ、ただし彼の生命は保て) ヨブ記2:6. wajjōmer jīsrā-'el 'el jōsēf, 'āmūθā happā'am, 'aḡārē rə'ōθī 'eθ pāneḏā kī 'ōḏāḡā ḥāj. (イスラエルはヨセフに言った、お前がまだ生きていてくれてお前の顔が見られたからは、もう今度こそ私は死ぬ) 創世記 46:30. これらも亦独立の代名詞を従えることが出来る. kō 'āmar 'āḏōnāj JHWH lā'āšāmōθ hā'ēlle, *hinnē* 'ānī mēvī vāḡem rūāḥ wiḥājīθem. (主なる神はこれらの骨にこう言われた、私はお前たちに息を吹き込んでやる、それでお前たちは生きるであろう) エゼキエル書 37:5. wajjiftaḥ hā'ehāḏ 'eθ šaqqō lāθēθ mispō laḡāmōrō bammālān, wajjar 'eθ kaspō wə-*hinnē* hū bəfī 'amtaḥtō. (その一人が宿で驢馬に飼葉をやろうと袋を開いて見ると、自分の銀があった、それは袋の口にあったのである) 創世記 42:27. なお §5 に引用した士師記6:36には *hinnē* 'ānōḡī が用いられている. wə-'ōḏ 'ānī mēḏabbēr battēfilla, wəhā'iš gavri'el 'āšer rā'iθī vehāzōn battēḡilla, mū'af bi'af nōḡēā' 'ēlaj kə'eθ minḥaθ 'ārev. (まだ私が祈りのことばを述べている最中に、夕の供物の時刻であるが、初めに幻の中で見たかの人ガブリエリが速かに飛びながら私のもとに来た) ダニエル書 9:21. こゝでも人称接尾語は独立形と同じく主格として扱わなければならない. 疑問副詞 'ajjē (何処) も亦同じ意味での人称接尾語をとる. wajjiqrā JHWH 'ēlōhīm 'el hā'āḏām wajjōmer lō, 'ajjekkā. (主なる神は人に呼びかけて言われた、お前は何処にいるのか) 創世記3:9. アラビア語では接続詞 law-lā (なかったらば) がよく人称接尾語を従える. wa-lawlā-hā mā kunta taḡilu 'ilajja 'abadan. (もし彼女がいなかったら、貴方は決して私と結ばれなかったでしょう) 千夜一夜、カイロ版121夜. 'ana, lawlā-ki, lamā kuntu walā kāna ḡinā'i. (貴女がいなかったら私自身も私の歌もあり得ないだろう) フアド・アル・ハッシュ. law-lā の後に名詞が従うときには勿論主格に置かれる. また時には独立の人称代名詞が来ることもある. wa-lawlā difā'u -llāhi lāqā mina -l'aḏā. (神の守護がなかったらば災禍に遭遇したであろう) アル・マアルリイ. lawlā 'antum lakunnā mu'minīna. (お前達がいなかったら我々は信者になっていただろうに) アル・カズウイニ. それ故 lawlā につく人称接尾語も当然主格と解されるのである. アラビア語の近代方言では主格としての人称接尾語の応用がもう少し広いようである. 方言によって少しずつ差異があるけれども, lissa 或は ba'd (まだ), wēn 或は fēn (何処), mā-dām 或は mā-ṭūl (~するかぎり), 'ammāl (しつゝある) 等人称接尾語をつけて用いた例が報告されている. シリヤ方言 mā ṭūluḥ ḡayif min ilḡāmūlāh mā yi''ta' binnahr. (激流を恐れている限り彼は河を渡ることが出来ない) G. R. Driver, A Grammar of the Colloquial Arabic of Syria and Palestine, p. 206. その他種々の場合の例については

Brockelmann, Grundriss, II. Band, §183 を参照願いたい。

§ 7. アラビア語には “‘inna とその姉妹群” (‘inna wa-‘ahawātuhā) と称する一群の語がある。ヘブライ語の hinnē に対応する ‘inna をはじめ ‘anna (～ということ) [ka-‘anna (あたかも～のようである)], lakinna (しかし), (la-)-‘alla (恐らくは), 及び lajta (～であつたらなあ) がこれである。これらのいずれかに導かれる文中では主語は対格に置かれる。人称代名詞の場合には勿論接尾語の形で添えられる。θumma ‘inna ‘urwata -sta’đana rasūla -llāhi SL ‘M fi -lhurūgi ‘ilā qawmihi lijad ‘uwahum ‘ila -l-islāmi. faqāla lahu, ‘innahum ‘iđan qātilūka. (それからオルワはイスラムの教えを奨めるために一族のところへ出かける許可をマホメットに願った。彼は言った、そんなことをすれば彼等は必ずお前を殺すだろう) イブン・サアド、各層人物伝。falaw ‘arafa ‘annahu min ‘amali -nnaḥli, la-taḥajjara ‘ajḍan, min hajṡu ‘anna ḍālika -lḥajawāna -ḍḍa’ifa kajfa ‘aḥḍaṡa ḥāḍihi -lmusaddasāti -lmutasāwijata -l-‘aḍlā’i -llati ‘aḡaza ‘an miṡliha -lmuhandisu -lḥāḍiqu ma’a -lfiṡḡāri wa-lmiṡṡarati. (そして若しそれ〔巢〕が蜜蜂の仕業であると知ったならば、老練な技師がコンパスと定規を以てしても作ることが出来ないようなこれらの正六辺形をあの弱い動物がどうして創作したかということに又もや仰天することであろう) アル・カズウイニ、万物の驚異。rubba lajlin ka’annahu -ṡṡubḥu fi -lḥusni, wa’in kāna ‘aswada -tṡajlasāni. (夜はたとえ法服のように黒くあっても、うるわしさは朝さながらのことが度々ある) アル・マアルリイ。wa-lfursu wa-lmaḡūsu tunkiru -tṡūfāna; wa’aqarra bihi ba’ḍu -lfursi lākinnahum qālū, kāna bi-ṡṡa’mi wa-lmagribi minhu ṡaj’un fī zamāni ṡahmūraṡa, wa-lākinnahu lam ja’umma -l-umrāna kullahu. (波斯人並びに拜火教徒は大洪水を否定している、波斯人の一部にはそれを認める者もあるが、しかしこのように言っている、タハムルス王の時代にシリヤとマグレブに相当の洪水はあったが、それは開化地域のすべてを覆いつくしたわけではなかった) アル・ペイルウニ、歴代の遺物。‘aswadu fi faṡli -ṡṡitā’i ‘aqbala ja’huḍu -ṡṡalḡa wajafruku bihi badanahu. faqāla lahu, limāḍā ḍālika. faqāla, la’alli ‘abjaḍḍu. (ある黒人が冬の季節に雪を取って自分の体をこすりはじめた。何故そんなことをと人に問われて、彼は言った、多分私は白くなれるでしょう) ルクマン。lajtani ‘abṡartu ḥāḍa -lwaqta fī ḍi -lbi’ri ḍi’ban. (狼の奴がこの井戸に落ち込んだ態をたった今眺めることが出来たらよいのに) 千夜一夜、各版149夜。‘inna 群の後に主語として何故対格が置かれねばならないのか。その理由は未だ十分説明されていない、我々は深く考えることなく特殊な語法の一つとして鵜呑みにして来たものである。これらの語は上に述べた lawlā, 或はヘブライ語の hinnē や ‘ōḍ と同じく副詞乃至接続詞であ

って、対格に置かれている名詞或は代名詞と統辞論上特に密接に結びついているわけではない。従ってこれらが名詞の格を左右するというのは、少なくともセム言語学の領域に於ては不可解な現象である。アラビア文法家の多くは 'inna とその姉妹群を別名「動詞類似の助辞」とも称して、或る種の動詞の意味を持っているからその目的語として対格は当然だという風に考えている。例えば 'inna は 'akkadtu (私は断言する), ka'anna は šabbahtu (私は警える), lākinna は 'istadraktu (私は訂正する) のような動詞に置き換えることが出来るからだという。聞かからに如何にも苦しまぎれといった感じがする。しかし対格にこだわる限りこのような考え方から脱することは出来ないであろう。主格であるべきものが何故対格になっているかという方向からも考えてみる必要がある。'inna, 'anna, lākinna がそれぞれ 'in (ヘブライ語 hēn), 'an, lākin の長形であることは明らかである。尤も短形の方は直後に名詞を従えることは稀ではあるが、ともかくそういうときには主語としての名詞は依然として主格のまゝである。短形も長形もその意味は勿論全く同じであるから、もし動詞類似説に従うならば短形の場合も対格が要求されねばならない。更にまた 'inna 群のそれぞれに mā を接尾した語形があるが、これ亦主語への影響力は持たない。以上の用例については Wright, A Grammar of the Arabic Language, vol. II, §36 (REM. e, d, f) を参照して頂きたい。こゝにはまた短形と共に対格の名詞或は対格と見られる人称接尾語が用いられている例さえも挙げられている。bi-'anka rabi'un wagajθun marī'un [又は muri'un]。 (人は知る、あなたが春をもたらす雨であり豊かな恵みの雨であることを) [イブン・ヒシャム]。逆にタア・ハア章63には 'inna hāḏāni la-sāḥirāni。 (まことこの兩名は魔法使である) という句があって、'inna の後の主格が昔から問題になっている。惜しいことに近來の印刷本では無難に 'in hāḏāni と読んでいるが、原形はやはり 'inna である。こうなると問題は益々紛糾してくるようであるが、却ってこれが解決の手掛りとなるのである。

§ 8. これまでに示して来たようにセム語の人称接尾語は格という点では甚だ曖昧であった。単に接尾語だけのことではない。独立形も後倚の人称代名詞も実は必ずしも主格専用ではなかったのである。アラム諸語では三人称複数の代名詞が前置詞を介せず動詞の目的語となると、すなわち対格としての場合は、人称接尾語ではなくて独立形或は後倚語が用いられている。聖書アラム語 wūvaṭṭilū *himmō* bə'eōrā' wəḥajil。 (彼等は腕力と権力とで彼等 [ユダヤ人] に [神殿の工事を] 中止させた) エズラ記4:23。パレスチナ・ユダヤ人アラム語 W'ŠKH 'NWN (= 'in-nūn) ŠRJN BBQ'T DN WRMH 'LJHWN BLJLJ' MN 'RB' RWḤJHWN WHWW' QṬL BHWN BLJLJ' WTBR 'NWN。 ([アブラムは] 彼等がダンの谷間に屯しているのを見つけたので、夜四方からこれを襲い、夜彼等を殺しつゞけてこれを打ち敗った) 創世記外典

(MGJLT ḤṢWNJT LBR'ŠJT) 22欄。サマリヤ語 L' TSGD LWN WL' TŠMŠ-NWN. (それらを拜んではいけない、またそれらに仕えてはいけない) 申命記5:9. シリヤ語 wəḥalēn dəšarkā dəsimīn waw dənawbəlūn 'ennēn wansamməšūn 'ennēn. (その他の者は彼女等を案内し彼女等に奉仕するよう命を受けていた人々である) エペソの司教ヨハネ, 教会史. バビロニヤ・タルムウド・アラム語 'ōḫəl-*inhō* wə'ašqīnhō [ <'ašqī+*inhō* ], wūmaḫ ləhō bis-tarqē. (彼は彼等に食物と飲物を供し, 彼等のために褥を延べた) 断食. 大体セム語の指示代名詞や疑問代名詞には, アラビア語における双数の指示代名詞のような人為的なものは問題外として, 形の上での格の区別は全然認められない. 人称代名詞も亦本来は格を区別しなかったに違いない. 事実アラビア語の三人称複数 (男性 hum, 女性 hunna), 同双数 (humā) は独立形がそのまゝ接尾語にもなっている. このことは格が区別されていなかったという意味である. 接尾語として用いられた際のこれらの代名詞はむしろ後倚的と見る方が適切かも知れない. 一方シリヤ語に於て後倚的に用いられる 三人称複数男性 'ennōn, 同女性 'ennēn は形の上から明らかに独立形 hennōn, hennēn から区別されているが, これを独立形中の強弱の別と考えることも出来る. このように一部の人称代名詞に於てはその三つの様相, 即ち独立形, 後倚語, 接尾語間の境界が明瞭でない. ところがまた一方では独立形として固定したものゝ中にも強弱の別が認められる. ヘブライ語の一人称単数の 'ānōḫī (アッカド語 anāku) と 'ānī の両形は顕著な例である. 人称代名詞の種々相は結局強弱の程度に帰せられよう. 換言すれば量的なものである. アラビア語の疑問代名詞 mā (何) は前置詞と結合するとき, 例えば li-mā=li-*ma* (何故) のように短縮されることがある. この -ma は人称代名詞に倣えば後倚語ともいえるし接尾語ともいえようが, 文法上特に取り上げるほどの関心は持たれていない. 人称代名詞の場合も本来はこのようなものであったであろう. 'inna 群に関していえば, これらは当初好んで弱形である人称接尾語を従えたものに違いない. 人称接尾語はその一般的な用途の方面から次第に斜格の觀念を具えて来た. 既に 'inna 群に添えられていた接尾語にもそれが意識されて来れば, 主語となる名詞にも影響するのが当然の勢いである. 属格か対格かの分岐点に立って 対格が選ばれたのは 'inna 群の側に原因があろう. 前置詞ではないということ, そしてさきに述べたのとは別の意味で語形から受ける感じが動詞に似ているということが主な原因ではなかろうか. 今はそこまで追求しない.